

# なぜ物語に必然性が必要なのか——アーレント物語論の展開

橋爪大輝\*<sup>1</sup>

キーワード： 物語 必然性 パターン 歴史 意味

## はじめに

アーレントは、最後の著作『意志』（『精神の生』第二巻、死後刊行）において、ドゥンス・スコトウスの意志論を解釈するなかで、脱線的に物語について触れている。彼女にとって、人間の心的な働き（mental activity）は、複数のモードをもっている。彼女が思考と意志と呼ぶのは、そうしたモードのうちのふたつである。このうち、物語というしかたで世界に生起する事象を理解するのは思考する自我であるが、それが歴史的探究を開始するのは、アーレントによれば意志する自我のいら立ちを鎮めるためである。意志は原因的な（causative）行為者であるが、過去の出来事の原因となることはできない。それゆえ、過去にたいして無力であることにいら立つとともに、出来事についてその原因を求めるといっているのである<sup>(1)</sup>。「〈なぜ〉という問い——なにが原因（cause）か？——は、意志によって提起される。なぜなら意志は自分自身を原因的な行為者として経験するからだ」（LM2: 140）。

「知性は、意志に〔結果を〕説明するような原因を提供し、意志が自分の無力さにいら立っているのを鎮めようとする。知性はそこで、物語を作成して、与えられた要素が適所にぴたりと嵌まるようにする（make the data fall into place）」（ibid.）。かかる主張の当否はひとまず措くとしても、こうした経緯において、彼女は意志論のなかで物語に触れることになったのである。知性——これは思考する自我の異称である——は、出来事の原因を説明しようとして、物語を語るのだ。

だがそのさい彼女が述べたつぎの言明は、一定の解釈を要請するものである。

なんらかの一直線の出来事の継起が、偶然的にではなく必然的に因果的に生起した、というアプリオリな想定がなければ、つながりを持ついかなる説明も可能ではなくなるだろう。（LM2: 140）

私たちはこれを〈必然性テーゼ〉と呼んでおきたい。本稿の目的は、アーレントが物語についていちばん最後に発したと言える、この命題の意味を解釈することにある。物語るためには出来事の継起の必然性をアプリオリに想定する必要がある——なぜそうなのだろうか。以下ではその理由を明らかにしたい。

この命題はそれだけでは理解が困難であり、解釈を要する点ですでに問題であるが、それだけではない。アーレントがこの時点までにしてきた歴史哲学的な主張とも矛盾しているように見える、という点で二重に問題ぶくみなのである。

アーレントにとって、歴史を理解する方法としての物語は、すくなくとも『全体主義の起原』の方法論として物語論を提示した「理解と政治」（1953年）以来、中心的な関心のひとつであった。しかし、彼女はこれまで人間の自由を強調し、歴史を必然的な法則によって理解しようとすることを批判してきたのである。上記の主張はこの点に照らせばいっそう理解しがたく、また（アーレント自身に

---

（所 属）

\* 1 山梨県立大学

とつても) 容認しがたいようにも思われるのである。

おそらくそのせいであろうか、〈必然性テーゼ〉は、アーレント物語論を主題とする従来研究においても、わりと無視されてきたようにおもわれる。たとえばベンハビブ (Benhabib 2003) やムロヴリエ (Mrovlje 2014) は、その箇所についてひと言も触れない。そもそも物語論解釈において、ふつう『意志』が取り上げられることが少ないのである。シュレーター (Schröter 2014: 226ff.) はこの箇所をきちんと取り上げているが、私見では解釈を加えるというよりは、パラフレイズして紹介するだけにとどまっているように見える。この箇所はなお解釈を必要としているのである。

本稿は以下のような構成をもつ。まず第一節で私たちは、アーレントの初期の論攷における必然性のカテゴリーの拒絶を検討したい。彼女は物語という歴史学的方法を強調するが、物語は必然性に対抗するために導入されたといってもよいのである。にもかかわらず、晩年の彼女は、むしろ必然性を物語に構成的なものとして見なしている。第二節で私たちは、『意志』における彼女の必然性概念を検討する。必然性は物語において「アプリオリ」に想定されるものとされるが、それは必然性が出来事どうしのあいだに「つながり」をつける役割を果たし (2・1)、さらに出来事から偶有的な要素を排除するという機能を有する (2・2) からである、ということが示される。このとき、必然性になぜそのような機能を果たすことができるのかが問題となろうが、ここで彼女が必然性を「パターン」というしかたで理解していることが、この問いに答えるうえで示唆を与える (2・3)。すなわち、彼女がここで想定している必然性とは、〈出来事 X が起こったならば、出来事 Y が起こる〉という、一種のパターンであると判明するのである。彼女の主張の核心とは、個別的な出来事も、このような一種の一般性と必然性を備えたパターンを経由することなしには、説明することはできないということだと、明らかになるであろう。

### 第一節 「必然性」の拒絶——『意志』以前

アーレントは論文「理解と政治」において、因果性 (causality) は歴史科学にはふさわしくないカテゴリーだとして退けていた。彼女自身のことばを引こう。

新しさは、歴史家の領分である。歴史家は——永遠回帰する事象<sup>ハブニング</sup>にかかわる自然科学者とはちがいは——、つねにたった一度きりしか起こらない出来事を扱う。この新しさが操作されうるのは、歴史家が因果性を主張し、出来事を原因の鎖によって説明できるようなふりをするときである。この原因の鎖が最終的に出来事につながった、というのだ。[……] 歴史家を本当の予言という<sup>ギフト</sup>天賦から切り離すものとは、ただ、人間頭脳の嘆かわしい肉体的限界であるように思われる。人間頭脳は不幸なことに、同時に作動するあらゆる原因を包括し、正しく結びつけることなどできないからだ [と、主張される]。ところが因果性は、歴史科学にまったくなじまない歪曲的なカテゴリーなのである。(EU: 318f. 傍点付加)

歴史家が因果性を利用するばあい、出来事は、ある原因からの必然的帰結として理解されることになる。引用後半ではさらに、彼女はこうした立場に、歴史家には「予言」が可能であるとする主張を帰属させている。たしかに、原因を包括的に枚挙しえない人間頭脳の限界のゆえに、事実上はこの予言は不可能とされている。しかし、不可能性が頭脳の限界に帰せられているということは、裏をかえせば、予言は原理的には可能である、ということの意味するであろう。

このように、アーレントが批判的な眼を向けているのは、歴史学に決定論を導入するような立場である。彼女によれば「[...] 現代の歴史家とイデオロジストは、なんらかの客観的因果性の概念、あるいは必然性への迷信的な信仰によって、かくも魅了されてきた」(EU: 326, n.14. 傍点付加)。かくて必然性とは、このような決定論を組み上げている概念のひとつに他ならない。とはいえ「あらゆる因果的な歴史記述が、意識的にか無意識にか前提としている必然性は、歴史のなかには存在しない」(EU: 326, n.14)。これこそが彼女の批判の要点なのである。

こうした主張は、人間は自由であり、たえず新たなることをはじめるという、アーレント固有の人間存在の理解に発するものである。「世代が継起するなかで、こうした始まりが連続して起きていることは記憶可能であり、まさしくこの事実が、歴史を保証している。この歴史はけっして終わりえない。なぜならそれは、その本質が始めることにあるような存在者の歴史であるからだ」(EU: 321)。だからこそ、因果的な決定論にもとづく歴史学は、人間事象としての歴史を把握しえないものなのである。

そして、こうしたアーレントの姿勢は一過性のものではない。私たちは『人間の条件』にも『過去と未来のあいだ』にも、同旨の主張を見いだすことができる<sup>(2)</sup>。そして、アーレントが物語論を展開したのは、因果性とはべつものしかたで出来事を語るすべを見いだすためだった<sup>(3)</sup>。ところがいまや『意志』では、「必然性を想定することがなければ、物語はあらゆるつながりを失うであろう」(LM2: 140)と言われることになる。必然性は物語に対立するどころか、その核心に導入される仕儀となるのだ。

アーレントは、(1)歴史における必然性(因果的決定論)を退ける姿勢を転換し、決定論を採用したのだろうか。それとも(2)〈必然性テーゼ〉で用いられている「必然性」は、それまでの著作で言われていた決定論的な必然性とは違った意味をもっているのだろうか。——回答をあらかじめ先取りしてしまえば、アーレントはここで、従来論著においてとは異なる意味で、必然性という術語を用いている(つまり(2))と、私たちは解釈する。したがって、『意志』における必然性の概念の内実が明らかにされなければならない。そこで節をあらためて、〈テーゼ〉そのものがなにを主張しているかを、詳しく検討してみよう。

## 第二節 〈必然性テーゼ〉・解読

### 2・1 物語のアプリオリな前提としての必然性

アーレントが『精神の生』第二巻第12節において提示した〈必然性テーゼ〉を、思いかえしておこう。そのさい、解釈のために原語の表現をすこし補ってみたい。「思考する自我は生成したもの、そしていま存在するものの〈意味〉について考察する(pondering)」が、そのさい——

なんらかの一直線の出来事の継起(sequence)が、偶然的にではなく必然的に因果的に生起した(having been caused necessarily)、というアプリオリな想定がなければ、つながり(coherence)を持ついかなる説明も可能ではなくなるだろう。(LM2: 140. 既出)

物語は、出来事と出来事のあいだの関係を説明<sup>(4)</sup>する。そのために必要なものが、出来事が連続的に、「必然的に因果的に生起した」という「アプリオリな想定」である、というのだ。アプリオリであるということは、この想定が、歴史の具体的・経験的な内実のいかに左右されず、そもそもそう

した歴史的認識を可能にする条件のレベルにかかわる、ということを示唆していよう。つまり「必然性」の概念は、歴史的認識の前提をなすのである。

必然性はなぜ必要なのだろうか。この引用ではその理由は、さしあたりひとつしか述べられていない。引用後半の「つながり」が、それである。さきほど、物語は出来事どうしの関係を説明すると述べたが、さしあたり出来事と出来事をそれぞれ別箇の個体として捉えるならば、これらは相互に独立であるということができる。ひとつの具体的な物語を使って考えてみたい。〈ある部隊が戦闘Aに偶然勝利した結果、部隊に慢心が広がり、のちの戦闘Bにおいて敗走した〉という物語が語られたとする。このとき〈戦闘Aにおける偶然の勝利〉という出来事(=  $E_1$ )と、〈戦闘Bにおける敗走〉という出来事(=  $E_2$ )は、それ自体としてみれば相互に独立したものである。

物語るさい、ひとはこれらの出来事をなんらかの「結合子」で結びつけなければならない。引用でアーレントは、この「結合子」の役割を果たすのが必然性である、と主張しているようにおもわれる。いったいどうして、必然性はそうした役割を果たしうるのだろうか。——この点に答えるまえに、つづく箇所ではアーレントはもうひとつ、必然性に役割を負わせている。さきにそちらを確認しておきたい。

## 2・2 偶有的な要素の排除

アーレントのこぼれを読み継いでいく。

物語を準備し、語るための明白な方法、しかも可能な唯一の方法でさえあるのは、現実の出来事(happening)から、「偶有的な(accidental)」要素を削除する、ということである。この「偶有的な」要素を、誠実に数え上げようとするのは、いずれにしても不可能かもしれない——電子化された頭脳にとってさえである。(LM2: 140)

この引用から分かるとおり、アーレントが必然性に負わせる第二の役割とは、物語の対象となっている出来事から「偶有的な」要素——当の物語にとって非本質的な要素——を排除する、というものである。しかし出来事においてなにが「非本質的、か、はどのような尺度において判定されるだろうか。

抽象的なレベルでこのように書くだけでは、なにが問題点になっているのかが見とおしづらいとおもわれるので、さきほどの〈全滅した部隊〉の実例に立ちかえてみたい。私たちはすでに完成した物語を見ているので、〈戦闘Aにおける偶然の勝利〉( $E_1$ )と〈戦闘Bにおける敗走〉( $E_2$ )というふたつの出来事がことさらにピックアップされることに違和感を覚えない。けれどもここで、 $E_2$ という結末からさかのぼって、その原因を探ろうとする歴史家の立場に立ってみたい。そのとき $E_2$ に先行しその原因となりうる出来事は、 $E_1$ 以外にも無数に存在するはずである。たとえば〈その部隊では前日夕食がパスタだった〉(=  $F_1$ )、あるいは〈戦闘Bの起きた日は、朝晴天であった〉(=  $G_1$ )…等々。このような無数の出来事は、物語が語られるにあたっては、「『偶有的な』要素」として削除されなければならない。こうしてさきの物語において、出来事 $E_1$ は出来事 $E_2$ に、たんに時間的に先行しているだけでなく、なんらかの意味で「本質的な、連関を有していなければならないのである。しかしその連関はどのようなものなのだろうか。そして、そうした「本質的な、連関を有する出来事を、( $E_1, F_1, G_1$ …etc. という) 無数の出来事のなかからどうすれば選び出すことができるのだろうか。——じつは、

「必然性」という「アプリアリな想定」は、このような判定をも可能にするものなのである。

### 2・3 必然性のパターン

ここでいちど問題を整理しておこう。アーレントは物語において必然性がアプリアリに想定されると考えている。その理由はさしあたりふたつである。(1)必然性によって出来事と出来事のあいだのつながりある説明が可能となり、さらに(2)偶有的な要素を除去することが可能になる、というのである。問題は、いかにしてそれらが可能になるか、である。以下では、アーレントがここで考えている必然性の概念を、さらに彫琢していきたい。

その具体的な手がかりは少ないが、以下の引用は、私たちの問いに一定の示唆をもたらしてくれる。

精神 […] が、もっぱら自分自身の内面的なもののみから方向づけを得ようと決め、過去を省察する状態に入ると、つぎのことは見いだすだろう。すなわちここでも〈生成〉の結果としての事実性によって、プロセスのランダムさはすでに必然性のパターンへと整序しなおされ (re-arranged) たり、消し去られたりしている、ということである<sup>(5)</sup>。(LM2: 139f. 傍点付加)

引用において、必然性が〈パターン〉というかたちを取るとされ、そのパターンへとランダムさが整序されると言われていることが、目につく。パターンとは、個別の要素が一定の配列に置かれることで構成される「型」を意味しよう。すなわち、アーレントが物語においてアプリアリに前提する必然性とは、出来事という個体が、べつの出来事とのあいだに取りうる関係を、あらかじめ指定する型・パターンのことだ、と言えるのではないか。

そうなのだろうか。引きつづき、同じ具体例に即して考えてみたい。〈ある部隊が戦闘Aに偶然勝利した結果、部隊に慢心が広がり、のちの戦闘Bにおいて敗走した〉という物語である。この物語を構成する〈戦闘Aにおける偶然の勝利〉( $E_1$ )と〈戦闘Bにおける敗走〉( $E_2$ )というふたつの出来事は、すでに述べたとおり、それだけ単体で抜き出すなら相互に独立したものである。このとき、たとえば〈勝利は勝利者の慢心を生み、必ずのちの敗北を招く〉(= P) といった、より一般的で「法則化された必然的なパターン」が私たちに知られているとすれば、どうか。私たちは、このような「一般的パターン」を介することで、個別的な出来事  $E_1$  と  $E_2$  を結びつけることができるようになる。つまり、この必然的なパターンこそ、私たちの探していた出来事どうしの「結合子」となりうるものなのである。(少なくとも原因を求めるような物語についていえば) こうしたパターンを想定することなしに、出来事どうしを結合することはできない。

じっさい、時間的な先後関係のみでは、物語は成立しない。たとえば連続するふたつの時点に生じた任意の出来事をふたつ、ピックアップしてみよう。時刻  $t_1$  に〈私が自室で本を読んでいる〉という出来事  $E_1$  があり、直後の時刻  $t_2$  に〈隣の銀行に強盗が入った〉という出来事  $E_2$  が起こったとする。これらを結びつけて〈私が自室で本を読んでいると、隣の銀行に強盗が入った〉などと語ったとしても、その物語はなんの意味ももたない、支離滅裂なものとなるだろう。このふたつの出来事は、一見結びついているように見えて、まったく結びついていないのである。このふたつを結びつけて、物語を語るためには、 $E_1$  と  $E_2$  の「結合子」となりうるような、なんらかの一般的パターンを介在させなければならない。

さらにこのパターンは、偶有的な要素の排除においても、有効に機能する。〈戦闘Bにおける敗走〉という出来事 ( $E_2$ ) が与えられており、かつ上記のパターン (P) が知られているとき、当の出来事に先行する無数の出来事 ( $E_1, F_1, G_1 \dots$  etc.) のうち、〈戦闘Aにおける偶然の勝利〉 ( $E_1$ ) こそが、 $E_2$  の生起にとって決定的な重要性があるということを見分けることが可能となる。パターンPこそが、偶有的な要素 ( $F_1, G_1 \dots$  etc.) を、物語には無関係な要素として排除し、本質的な要素である  $E_1$  を剔抉することを可能にし、ひいては物語そのものを可能にするのである。

必然性は物語におけるアプリアリな想定であるというアーレントの主張は、個別的な出来事どうしの関係を語る物語もまた、パターンという必然性と一般性の次元を介することなしには、語りだすことはできないという洞察を示していたのである。

しかし、私たちの解釈にたいして、ここで以下のように反論されるかもしれない。つまり、『意志』の記述の限りでは、必然性のもっぱら、過去の出来事の変更不可能性・取消不可能性のみを意味しているように見え、本稿が示したような〈パターン〉や法則としての意義はくみ取れない、と。じっさいアーレントはつぎのようにも言う。「ある事象は、まったくランダムに生起したのかもしれないが、ひとたびその事象が存在するにいたり、現実性を獲得すると、その事象は偶然性の様相を喪失し、私たちにたいして必然性の装いをとって現前する」(LM2: 138)。

しかし、私たちの考察からは、必然性を取消不可能性だけで理解することはできないことが、明らかになっているとおもわれる。なぜなら、出来事の一定のしかたでの継起が取消不可能であるだけでは、偶有的な要素を排除することができないからである。たとえばひとが不注意でスープを服にこぼしてしまった場合、そうした出来事は取り消すことができないという必然性の様相をとって現われるだろう。しかしそのとき外が晴れていたか、雨が降っていたかということは、この事件にとって偶有的である。それゆえ、必然性を出来事の取消不可能性とのみ解釈する場合、こうした要素を物語から排除することはできなくなってしまうのである。

## 2・4 註釈的補論

ただし、以上見てきたことから分かりますとおり、アーレントがもちいた「必然性」という表現は、実態に鑑みるならばやや強すぎると言わざるをえない。

(1)アーレントが「アプリアリ」であると言ったのは、必然性(パターン)が物語を可能にするということ(〈必然性テーゼ〉)である。このテーゼは歴史的な認識の条件のレベルにかかわっており、物語をするかぎりではそれ自体必然的な命題である。それにたいして、個々のパターンは、たしかに複数の歴史的な事象に適用可能であり、そのかぎりでは個別性のある程度超越してはいるが、あくまで経験的に知られるものにすぎない。パターンという経験的法則そのものは、〈必然性テーゼ〉のようにアプリアリなものではないのである。また、このパターンのなかには、歴史学にこれまで蓄積されてきたものや、ある文化に所属することでおのずと体得され、ほとんど直観的に適用できるようなものまで、様ざまなものが含まれる。その結果、パターン自体がべつパターンと優劣を争う、ということも可能であるように思われる。

(2)そしてこのパターンは経験的なものである以上、それが示す出来事の継起は、どれほど「必然性」に近いとしても、実際のところせいぜい「高度の蓋然性」にとどまると考えられる。私たちが挙げた、〈勝利は勝利者の慢心を生み、必ずのちの敗北を招く〉という例にも、もちろん反例がありうる(場合によってはこのパターンは「高度の蓋然性」をも持ちえないかもしれない)。しかし、歴史

的な認識において活用されるパターンには、高度の蓋然性以上のものは望みえないようにおもわれる。また、アーレントは物語という営みについて、その主体を専門的な歴史家のみにはかぎらず、ふつうの人びともまた物語をなしようと捉えていた。これまでに私たちが明らかにした物語の構造は、人びとが生活の出来事やみずからの人生について語る物語にも適用されるものであり、こうした物語において利用されるパターンはやはり厳密な意味で必然的なものではないだろう。

## 結 論

私たちは、アーレントが最後の著作『意志』において発した、物語論にかんする命題（〈必然性テーゼ〉）を解釈することを目ざしていた。それは、必然性を物語のアプリオリな前提と見なすものであった。私たちの解釈によれば、〈必然性テーゼ〉は以下のようなことを意味している。

時刻  $t_1$  に、同時に出来事  $E_1, F_1, G_1 \dots etc.$  が起こっており、続いて時刻  $t_2$  に出来事  $E_2$  が生じたとする。このとき、 $E_1$  のタイプの出来事が起こったとき、必然的に——より正確には高度の蓋然性をもって—— $E_2$  のタイプの出来事が生起するというパターンが私たちに知られてさえいれば、先行する出来事  $E_1, F_1, G_1 \dots etc.$  のうち、 $E_2$  の生起にとって決定的な要素は  $E_1$  であるということを認識することが可能である。このとき、出来事  $E_2$  の原因を求める歴史家は、このパターンを偶有的な要素の排除に用いるとともに、見いだされた出来事と出来事のあいだの「結合子」としても活用し、出来事の継起の物語を語りだすことができよう。このように私たちは、出来事と出来事の間を説明するためにも、一定のパターンを必要としているのである。以上が、「なぜ物語に必然性が必要なのか」という私たちの問いにたいする回答である。

ここで、アーレントが『意志』でなした主張が、彼女がより初期には必然性や因果性を否定していたことと衝突する、という問題についても、一定の回答を与えておこう。結論からいえば、ここで私たちが明らかにした必然性の概念は、初期の因果性拒否と矛盾を来すものではない。彼女が拒絶したのは、決定論的な必然性を歴史認識に導入することであった。この決定論的な歴史観は、条件さえ整えば未来の予言すら可能であるとするような立場だったのである。

これにたいして私たちが示した『意志』における必然性の概念は、パターンと表現されるのがふさわしいようなミニマムな法則<sup>(6)</sup>であり、あくまで偶有的要因の排除と出来事どうしの結合という機能をもつにとどまるものだったのである<sup>(7)</sup>。これは、数理的・物理的な計算可能性を歴史の全体に及ぼすような必然的因果連鎖の観念でもなければ、「世界精神」や「階級闘争」といった理念的存在によって歴史の全体が統御されているとする観念でもないのである。

ただし、アーレントは「理解と政治」や『活動的生』では、因果性の代わりに〈意味〉をつうじて、出来事は理解されうるとしていた。本稿で示した必然性の概念と、こうした彼女の主張が通約可能なものであるかを明らかにすることは、今後の課題としたい。

## 参考文献

ハンナ・アーレント Hannah Arendt の著作は、以下の略号を用いて引用した：

- BPF *Between Past and Future: Eight Exercises in Political Thought*. Penguin. 2006 [1968].  
 HC *The Human Condition*. 2nd ed. Univ. of Chicago Pr. 1998 [1958].  
 LM2 *The Life of the Mind*, vol.2: Willing. Harcourt. 1978.  
 EU *Essays in Understanding*, Schocken. 1993.

二次文献は（著者名 刊行年：頁数）の要領で示した：

- Benhabib, Seyla. 2003 [1996]. *The Reluctant Modernism of Hannah Arendt*. New ed. Rowman & Littlefield.
- Mrovlje, Maša. 2014. "Narrating and understanding," in: ed. by Patrick Hayden, *Hannah Arendt: Key Concepts*. Acumen, pp.66-84.
- Schröter, Esther. 2014. *Erzählen, (Lebens-)Geschichte und Identität im Werk Hannah Arendts*. Litt Verlag.
- Weber, Max. 1988. "Die »Objektivität« sozialwissenschaftlicher und sozialpolitischer Erkenntnis," in *Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre*. 7.Aufl. J.C.B. Mohr (Paul Siebeck), S.146-214. (= 富永裕治／立野保男訳、折原浩補訳『社会科学と社会政策にかかわる認識の「客観性」』岩波文庫、1998年。)
- 伊勢田哲治2009「歴史科学における因果性と法則性」『歴史／物語の哲学』〈岩波講座 哲学11〉、岩波書店、95-119頁。
- 鹿島徹2006『可能性としての歴史——越境する物語り理論』岩波書店。
- ダント、アーサー・C 1989河本英夫訳『物語としての歴史——歴史の分析哲学』国文社。
- 野家啓一2007『歴史を哲学する』岩波書店。
- 橋爪大輝2019「出来事の〈意味〉とはなにか——「理解と政治」を中心にアーレント物語論を読解する」『倫理学年報』第68集、日本倫理学会、187-200頁。
- 浜井修1982『ウェーバーの社会哲学——価値・歴史・行為』東京大学出版会。
- 牧野雅彦2015『精読 アーレント『全体主義の起源』』講談社選書メチエ。

## 注

\* 本論文は、日本倫理学会第69回大会（2018年10月5日、於・玉川大学）のワークショップ「歴史的な人間の生——ハイデガー、レーヴィット、アーレントの思考」における報告「なぜ物語に必然性が必要なのか——アーレント物語論の展開を跡づける」を改稿したものである。

(1) 「〔思考と意志の抗争において〕意志は知性に指示し、ひとに〈なぜ〉という問いを問わせる。その理由は単純である。意志は——のちにニーチェが見いだすことになるように——『後ろ向きに〔＝過去に向かって〕意志する』ことはできないからである」(LM2: 140)。

(2) ただし、そこで見られるのは、「理解と政治」で念頭に置かれていたような数理的・物理的決定論とは別種の決定論である。アーレントは、たとえば『人間の条件』では、人びとの行為を「舞台の背後にある見えざる手によって導かれる人形のふるまい」にしてしまうような「神」の表象をプラトンのうちに見ている(HC: 185)。そしてこの神は「〈摂理〉や『見えざる手』、〈自然〉、『世界精神』、階級利害その他の真の先駆者である」(ibid.)。すなわち、歴史を超越し、それに意味を賦与するような、形而上学的存在者によって、人間の歴史を説明するような議論である。ただし、アーレントにおいてはこの種の決定論が、本文で述べた物理的な決定論と明確には区別されていないように思われる。たとえば『過去と未来のあいだ』ではこう言われる。「[...] マルクスは [...], 彼自身が歴史の領域におけるこの法則の起原と内容を見だし、そしてそのさい、歴史が語らねばならない物語の具体的な意味を見いだしたと考えた。階級闘争——マルクスにとってこの定式は、歴

史のあらゆる秘密を解除するように見えた。重力の法則が、自然のあらゆる秘密を解除したかのように見えたのと同様に、である」(BPF: 80)。この引用では、階級闘争のような概念が、自然法則と並列されている。アーレントは、法則性によって歴史を説明するような理論を、包括的に批判していたのである。

(3) ではアーレント固有の歴史学の方法論はなにかということ、そこに因果性ではなく〈意味〉を見いだすというものである。「理解と政治」論文を分析すると、アーレントは出来事の〈意味〉が三重の契機によって開示されると考えていたことがわかる。すなわち(1)連関性：出来事  $E_1$  の〈意味〉は、かならず他の出来事  $E_2$  との関係によって説明される。(2)遡及性：先行する出来事  $E_1$  は、後行する出来事  $E_2$  から遡及的に発見される。(3)全体性：出来事  $E_1$  と  $E_2$  は、それらを両端とする（あるいはそれらをも包含するより大きな）全体のなかではじめて、有意味となる。詳しくは、橋爪（2019）で論じたことがある。

(4) アーレントは、「(精神科学における)理解」と「(自然科学における)説明」というようなことばの使い分けをしない（この区別については、さしあたり野家2007: 53-69）。彼女の歴史理論においては、「理解」も「説明」も現われる。

(5) 引用の後半は、原文だと文法的に通っていない。原文は、“[...] it [= the mind] will find that here, too, factually, as the result of Becoming, has already re-arranged and eliminated the randomness of the processes into a pattern of necessity.” だが、これだと that 節の主語が存在しないことになる。筆者は、この文中の “factually” を “factuality” の誤植であると推察する。そこで本稿は、“factually” を “factuality” に修正して訳した。

なおこの推定は、アーレント自身が作成したタイプ原稿によって裏づけられる。タイプ原稿では、この箇所はつぎのようになっているからだ。“[...] it will inevitably find that factuality as a result of Becoming has already re-arranged and eliminated the randomness of the processes into a pattern of necessity [...]” (Arendt, Hannah. *Hannah Arendt Papers: Speeches and Writings File, -1975; Books; The Life of the Mind; "Willing"; Draft; Chapters; III. - 1975, 1923. Manuscript/Mixed Material, p.34.* <https://www.loc.gov/item/mss1105601121/>. 2021年10月16日閲覧、下線付加。) 下線部が、書籍版と大きく異なることが分かる。編者のメアリー・マッカーシーが変更したものと推察される（綴り間違いに関しては、組版によって生じた誤植の可能性も排除できないが）。

(6) アーレントは「法則」という表現を用いないが、彼女が「必然性のパターン」と呼ぶものは一種の法則的なものであるといえよう。歴史学から法則を取り除くことの困難性を、英語圏における論争史を整理しつつ示した論攷として、伊勢田（2009）がある。また、「歴史の物語論」の原点ともいえる、ダントの一書も、物語における法則の重要性を指摘している（ダント1989: 第十章）。ダントの法則にかんする議論については、鹿島（2006: 35-38）が簡便な見取り図を与えている。

(7) 牧野雅彦は、アーレントの『全体主義の起原』を解説した一書で、因果性を退ける彼女の方法論を念頭に、「いずれにせよそこで意図されているのは、やはり歴史的な因果関連の探究なのである」（牧野2015: 22）と述べている。本発表は、「歴史的な事実経過における原因と結果という意味での因果関係が排除されているわけではない」（ibid.: 242, n.11）という牧野の主張を裏づけるものにもなっている（対象テキストは『全体主義の起原』ではないが）。なお牧野は、同じ註で「ここではマックス・ヴェーバーが問題にしたような個別的・歴史的因果帰属と経験的法則性・規則性の

区別と関連はまだ検討されていない」(ibid.: 242-243, n.11)と述べているが、私たちの見たアーレントの物語概念、そこでのパターンの役割などは、ヴェーバーにおける歴史の方法論と親近性を示しているようにおもわれる。『社会科学と社会政策にかかわる認識の「客観性」』論文において、ヴェーバーは、「精密自然科学の意味における狭義の『法則的』連関」とはことなる、「規則の形式で表される適合的な因果連関 (adäquate ursachliche Zusammenhänge)」(Weber 1988: 179. 邦訳 90頁)なるものについて論じている。ヴェーバーによれば、そうした規則の認識はそれ自体目的にされることはなく、規則はあくまで個別的な因果帰属のための手段として用いられる。ヴェーバーの歴史記述における法則の重要性については、浜井(1982)の、特に第二章を参照。また、同章の第六節では、分析的歴史哲学(ポパー、ヘンペル、ドレイ等)との対比も行われており、その点もきわめて有益である。

## Why does storytelling need “necessity”?: Development of Hannah Arendt’s narrative theory

Taiki Hashizume<sup>\*1</sup>

### Abstract

Storytelling is one of the most important concepts in Hannah Arendt’s philosophy. She refers to this concept in her last book *Willing*, the second volume of *The Life of the Mind*, during her analysis of the concept of will according to Duns Scotus. Here she argues that our intellect needs to make use of “necessity” in order to tell a story. However, this statement seems to contradict to her argument on storytelling till this book, because she tended to emphasize that we had to refuse to use “necessity” as a historical category. So we need to reconcile these two arguments if we want to read Arendt’s theory on storytelling as a consistent one. In this paper, we will make clear that “necessity” has a function (1) to bind two events and make them coherent in terms of cause and effect and (2) eliminate any inessential events for the story which a storyteller wants to tell. Thus our conclusion is that “necessity” is constitutive for storytelling because of these two functions it has. And here “necessity” takes the form of a “pattern,” such as “if X happens, then Y must bring about.”

### Key Words:

story(telling), necessity, pattern, history, meaning

(Affiliation)

\* 1 Yamanashi Prefectural University